

美しい日本のアルケーを求めて

根井, 豊
元東京大学学生 | 九州大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1660359>

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp.206-207, 2015-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン :
権利関係 :

美しい日本のアルケーを求めて

根井 豊

大学入学直後のクラスの集合写真、服部君の姿は詰襟の学生服に、素足に下駄ばきである。駒場寮から集合時間に間に合うように急いで駆け付けたのであろうか。四六年前のその雰囲気は、今の服部君が醸し出す雰囲気と同じままである。

そのクラス、43LIII6B、つまり東京大学昭和四三年入学文科III類六組第二外国語ドイツ語選択クラスはドイツ語の岩崎英二郎先生をクラス指導教官として、無事に大学生活を開始した。服部君はポルト部に所属して、筋肉隆々の身体をつくっていた。

無事に始まった大学生活ではあったが、私たちの入学以前から、研修医制度の改革をめぐる学生の反対運動で医学部は紛争状態にあり、大学全体としては不穏な状態にあった。そのような中、六月に入り大学当局は、安田講堂を占拠していた学生を排除するために機動隊を導入した。それに対して全学の学生は、大学の自治、学問の自由を蹂躪するものとして反発し、他の学部も次々にストライキに突入した。教養学部も七月にストライキに入った。いわゆる東大闘争である。西暦でいえば一九六八年、七〇年の日米安保条約の改定・延長の問題も絡んで、学生運動は全国の大学で起こっていた。

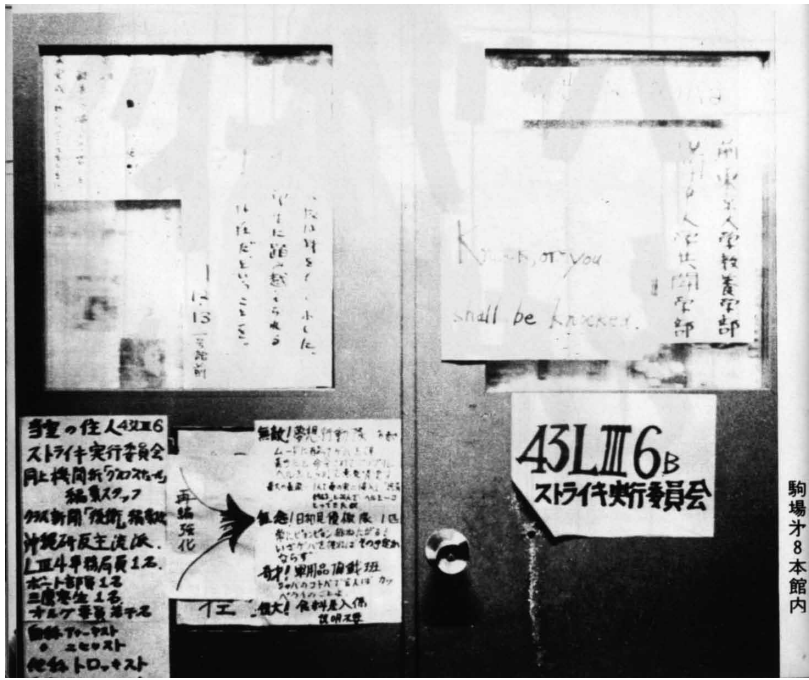
ストライキに入って授業は中断され、駒場の構内では全共闘のリーダーやその他のセクトの演説が連日響いていた。クラスでもときどき集まってこの事態をどう考えるかについて話し合いが持たれた。受験競争のなかについてのか投げ入れられ、社会の現状や問題に疎いまま大学生になった私たちに突きつけられた状況であった。勉強しようと思つて大学に入った。しかし勉強し知識を得て行くことが、他の人たちとの知識の差を利用した格差を生み出していく構造のなかで、大学で勉強することの意味が改

めて各人に問い質された。明確な答えは見いだせなかったが、安田講堂前で行われた全学集会や学内デモにはクラスの多くが一緒に参加した。

夏も終わり秋が深まっても事態は膠着状態であった。駒場の八号本館は学生が占拠し、夜も交代で詰めていた。そんな或る日、クラスの友人からバイトで行けないので、代わりに行ってくれということになり、夕方、八号本館に入っていくと、何階であったか、ヘルメット姿の服部君が、いつもの場所にいるという様子で陣取っていた。

その年の国際反戦デーには、全国の学生が東京に結集した。クラスでも駒場に集まり、四谷まで地下鉄で行き、四谷から新宿に向けてのデモ行進に参加した。シブレヒコールを繰り返して、ときにはジグザグ行進をしながら新宿に近づいた時には、既に暗くなりかけていた。新宿三丁目辺りに来た時、機動隊が迫ってきて隊列は分断され、私たちは四、五人一緒に大通りから歓楽街がある脇道に入った。更に追ってくる機動隊を逃れるため、皆ですでに明りの灯っていたガラスのドアを開けて、ある店に入った。そこはソープラントであった。事情を話すとわかってくれて、しばらくそこでかくまってもらった。通りが落ち着いて、皆で外に出て解散することになり、私は下宿にもどった。しかしその晩、デモはまだ続いており、新宿駅構内に入り国電は大混乱に陥っていたことなどは、翌朝の新聞で知った。

年が改まり、一月一日、大学当局は機動隊を導入して、安田講堂を占拠していた学生の排除を強行した。一八、一九の二日におよぶ攻防の末、学生は排除され、学内の闘争は終息に向かった。駒場でも徐々に授業が再開されていった。しかし完全に元に戻ったわけではなかった。そのまま大学で勉強を続けることに疑問をもって、後



Knock, or you shall be knocked, 駒場第八本館(写真は図書館榎垣文庫にあった『太陽と嵐と自由』から、翻字は『大学ゲリラの歌』(三省堂新書)、『安田講堂1968-1969』(中公新書)にある。

に大学を去って行った級友も二人いた。また宗教の道に入って去って行ったひともいた。そしてその年の入学試験は中止されることになった。それでも日々は平穩に向かつて行った。

その年の夏休みが終わり、九月の授業が再開されたときのこと、近くの席にいた服部君が、特に私にというわけでもなく感慨深げに話しかけてきた。「日本って、ほんとうに美しい国だね」と。夏休みの間に旅行をしてきたらしい。どこの風景かは聞かなかった。いや自然の風景だけではなく、ひとの暮らしぶりのことだったのかもしれない。本人の記憶はともあれ、それは私のこころに最も深く刻まれている服部君の言葉であ

る。

ストライキの関係で通常より半年遅れての専門学部への進学であった。服部君は国史学科へ、私は哲学科へ進んだ。本郷のキャンパスでは、たまにすれ違い挨拶を交わすくらいであったと思う。その後、彼は大学院に進み、助手を経て文化庁に入った。文化庁に入ったことはひとつてに聞いていたのだろう、私も知っていた。私の方もその後大学院に進み、助手を経て九州大学教養部に就職し、服部君のことは遠い記憶の彼方に消えつつあった。

ところが、詰襟、下駄ばきで登場して以来、二六年後、今度はネクタイ、背広の姿で、それでも雰囲気は同じままの服部君がまた私の前に現れた。平成六年、教養部等が改編され、比較社会文化研究科として発足した際の最初の教授会であった。大学院の研究・教育を担いうる人材として、請われて文化庁から比文に転任して来てくれたものと思われる。それから二〇年ほど、同じ大学院に所属する同僚として一緒に過ごせた時間は楽しいものであった。漁師さんに船を出してもらい、他の同僚も一緒に能古島の裏で魚釣りに興じた一日などとりわけ懐かしい思い出である。

振り返ってみると、私たちは大学入学早々、勉強することの意味を問いつかれた。そして服部君は、「美しい日本」を見出した。その延長上に、文化庁での仕事はあったのだろう。彼の「あるき／み／きく歴史学」は、その陰の部分を含んだ「美しい日本」のアルケー(原型、始まり、原因……)を探り、開示する営みであり、それはまたあの間に対する彼の回答でもあったのだと私には思われる。その営みは、服部君があるき、きくことができる限り、これからも続けられるだろう。

(元東京大学学生、九州大学教授)